

# 渴き

シリーズ～詩編～

2015/2/22

## 詩編42篇

【指揮者によって。マスキール。ユリの子の詩。】

涸れた谷に鹿が水を求めるように神よ、わたしの魂はあなたを求めよ。

神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつ御前に出て

神の御顔を仰ぐことができるのか。昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。

人は絶え間なく言う「お前の神はどこにいる」と。

わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす

喜び歌い感謝をささげる声の中を祭りに集う人の群れと共に進み

神の家に入り、ひれ伏したことを。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ

なぜ呻くのか。神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう

「御顔こそ、わたしの救い」と。



## 詩編42篇

わたしの神よ。わたしの魂はうなだれて、あなたを思い起こす。ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山から、あなたの注ぐ激流のとどろきにこたえて、深淵は深淵に呼ばわり、砕け散る。あなたの波はわたしを越えて行く。

昼、主は命じて慈しみをわたしに送り、夜の歌がわたしと共にある。わたしの命の神への祈りが。

わたしの岩、わたしの神に言おう。「なぜ、わたしをお忘れになったのか。なぜ、わたしは敵に虐げられ、嘆きつつ歩くのか。」

わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き、絶え間なく嘲つて言う。「お前の神はどこにいます」と。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ、なぜ呻くのか。神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。



# 序文

- 指揮者によって
  - 集団で歌われた(神殿で)
- マスキール
  - 詩編には13の「マスキール」がある
  - “教訓的な歌”とも考えられるが不明
- コラの子の詩
  - モーセに逆らったコラの子孫
  - 神殿で仕えていた
  - この歌はバビロン捕囚時,パレスチナ北部で作った

# 渴ききった魂

涸れた谷に鹿が水を求めるように神よ、わたしの魂はあなたを求める。神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつ御前に出て神の御顔を仰ぐことができるのか。

- 「涸れた谷」
  - 雨期の時だけ水が流れる川(ワディ)のこと
- 「鹿が水を求める」
  - パレスチナ南部は乾期になると雨が数ヶ月降らないので、鹿はかつて川であった所でさえ水を探す
- 「神よ、わたしの魂は…」
  - 作者の魂はカラカラに渴いて、神からの潤いを切に求めている



# ワディ(涸れた谷)





# からかわれ,泣き暮らす日々

昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。  
人は絶え間なく言う「お前の神はどこにいる」と。

- 「糧は涙ばかり」
  - 一日中泣き暮らしている
- 「人は絶え間なく言う『おまえの神はどこにいる』と」
  - 作者は異邦人の地にいる
  - おそらくバビロンの攻撃によってエルサレムが陥落し,都を追われた
  - 「わたしたちの神が共にいるから大丈夫だ」と言っていたユダヤ人たちを,敵が擲擧している(からかっている)



# 思い出にすぎる

わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす  
喜び歌い感謝をささげる声の中を祭  
りに集う人の群れと共に進み  
神の家に入り、ひれ伏したことを。

- 「魂を注ぎ出し、思い起こす」
  - 心の格闘。必死で、かつての幸せな記憶を思い出そうとしている
- 「祭りに集う人の群れと共に…」
  - 過越の祭りなどのために神殿にやってくる巡礼者たち
  - 神殿で仕えていた作者(門衛?)は、彼らと共に歌いながら(都に上る歌?),共に神殿に入り、礼拝を献げた



# 自分で自分を激励する

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ  
なぜ呻くのか。神を待ち望め。  
わたしはなお、告白しよう  
「御顔こそ、わたしの救い」と。

- 「なぜうなだれるのか…」
  - 弱り果ててしまった自分自身に語りかけている。自問自答
- 「神を待ち望め」
  - 神は必ずこの窮状を救って下さるはずだから、忍耐しよう
- 「御顔こそ、わたしの救い」
  - 完全にそう信じ切れてはいないが、口に出すことで自分の気持ちを切り替えようとしている

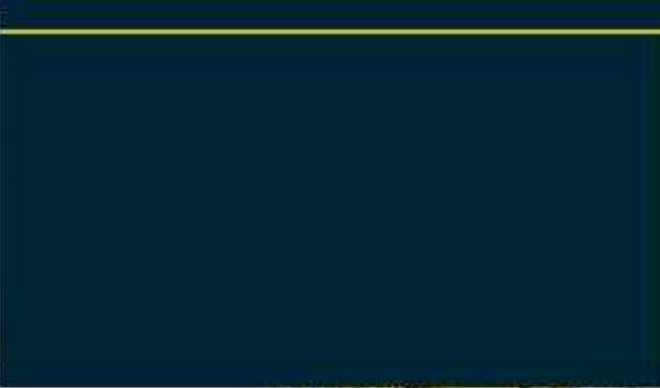


# 何でも否定的に思える

わたしの神よ。わたしの魂はうなだれて、  
あなたを思い起こす。ヨルダンの地から、  
ヘルモンとミザルの山から  
あなたの注ぐ激流のとどろきにこたえて、  
深淵は深淵に呼ばわり、砕け散るあな  
たの波はわたしを越えて行く。

- 「ヨルダンの地から…」
  - 作者はガリラヤ湖の北、ヘルモン山の麓に連れてこられている
- 「あなたの注ぐ激流の…」
  - ヨルダン地方はヘルモン山の豊富な雪解け水が流れている
- 「砕け散るあなたの波は…」
  - 激流の音が神からの裁きの声のように聞こえている
  - 水の豊かな所で渴く魂！





ヘルモン山

エルサレム



# 何とか気持ちを立て直す

昼、主は命じて慈しみをわたしに送り  
夜、主の歌がわたしと共にある  
わたしの命の神への祈りが。

- 「昼、主は命じて慈しみを…」
  - 主の慈しみはどこにいても届いてはずではないか
- 「夜、主の歌がわたしと共に…」
  - 眠れない夜、ふとなつかしい賛美が思い出される
  - もしかすると、一緒に連れ去られた人々の賛美や祈りの声が聞こえているのかもしれない



# 敵の声にかき乱される心

わたしの岩、わたしの神に言おう。  
「なぜ、わたしをお忘れになったのか。なぜ、わたしは敵に虐げられ、嘆きつつ歩くのか。」  
わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き、絶え間なく嘲つて言う。「お前の神はどこにいる」と。

- 「なぜ、わたしをお忘れに…」
  - 神に忘れ去られてしまったのではないかと疑う
- 「敵に虐げられ、嘆きつつ歩く…」
  - 作者は更に北(バビロン)を目指して歩いている途中なのかもしれない
- 「わたしを苦しめる者は…」
  - 何とか自分の気持ちを立て直そうと努力するが、敵のあざける声は「骨を砕く」かのごとく作者を苦しめ続ける



# 何度も自分に語りかける

- 「なぜうなだれるのか…」
  - 繰り返される自問自答
- 43篇と一体だったのではないか
  - 43:5にも同じ言葉がある

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ  
なぜ呻くのか。神を待ち望め。  
わたしはなお、告白しよう  
「御顔こそ、わたしの救い」と。  
わたしの神よ。



## 詩編42篇

【指揮者によって。マスキール。ユリの子の詩。】

涸れた谷に鹿が水を求めるように神よ、わたしの魂はあなたを求める。

神に、命の神に、わたしの魂は渴く。いつ御前に出て

神の御顔を仰ぐことができるのか。

昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。

人は絶え間なく言う「お前の神はどこにいる」と。

わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす

喜び歌い感謝をささげる声の中を祭りに集う人の群れと共に進み

神の家に入り、ひれ伏したことを。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ

なぜ呻くのか。神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう

「御顔こそ、わたしの救い」と。



## 詩編42篇

わたしの神よ。わたしの魂はうなだれて、あなたを思い起こす。ヨルダンの地から、ヘルモンとミザルの山からあなたの注ぐ激流のとどろきにしたえて、深淵は深淵に呼ばわり、砕け散るあなたの波はわたしを越えて行く。

昼、主は命じて慈しみをわたしに送り夜、主の歌がわたしと共にある  
わたしの命の神への祈りが。

わたしの岩、わたしの神に言おう。  
「なぜ、わたしをお忘れになったのか。  
なぜ、わたしは敵に虐げられ、嘆きつつ歩くのか。」  
わたしを苦しめる者はわたしの骨を砕き、絶え間なく嘲つて言う。「お前の神はどこにいる」と。

なぜうなだれるのか、わたしの魂よ  
なぜ呻くのか。神を待ち望め。

わたしはなお、告白しよう「御顔こそ、わたしの救い」と。わたしの神よ。



# 谷川の流れを慕う

谷川の流れを慕う(したう)鹿のよに  
主よ わが魂(たましい)あなたを慕う

あなたこそわが盾(たて)

あなたこそわが力

あなたこそわが望み

われは主を仰ぐ